# 日本語のテクストにおける関係構造
## —単純な構造から複雑さへ導く日本語学習—
## Relational structure in Japanese text:
## Guiding Japanese language learning for complexity through simple structure

**照屋一博**
**香港理工大学**

**要旨**

本研究は、日本語学習の初級レベルで導入される２つの項目を関係づける簡単な構造をもった関係過程文が異なる社会意義過程を具現するさまざまなテクスト型に頻出すること、そして、それが複雑性のひとつを生成していることを検証する。関係過程構造は、関係過程の意味型やテクストの専門性によっては、文より小さな構成体に埋め込み文として内蔵され、それによって文が幾重にも埋め込まれるという複雑性をもつようになる。その結果、正確な理解がむずかしい煩雑な文章となり、日本語学習者を戸惑わせる。本研究では、そういった大きな構成体がより小さな構成体に埋め込まれていく文法化を文法単位としての階級尺度（rank scale）や文の意味構造、そして文の機能過程構造を用いて解析することで煩雑な文章の理解が可能となる事実を、日本語学習者が英訳を通じて法律条例文を理解していく解析過程を通じて提示する。このことは、単純な関係構造を日本語上級レベルに再導入する必要性を示唆する。

**キーワード：**
関係過程構造、言語の複雑性、階級順位、テクスト類型、下級化

# 日本語のテクストにおける関係構造
## —単純な構造から複雑さへ導く日本語学習—

照屋一博
香港理工大学

## １．はじめに

言語は、森羅万象の現象を多様に映し出し、言語使用者の社会活動、そして意味創出の活動、つまり意義活動（semiotic activity）を可能にする。しかし、言語化された多様性は、複雑性の異なる文構造のなかに表象を受けるため、習得が容易でない場合が多い。それは、言語の複雑性が分層化された（stratified）言語内の各文層体系、つまり、音韻体系／書記体系、語彙文法体系、意味体系に特化していて、言語学習自体を複雑にしているからである。しかし、複雑性を取り扱う学習ストラテジーの欠如にもよるといえるだろう。たとえば、日本語学習者は、名詞化、複文結合、メタファー、敬語化、結束性、レジスターなどのような素性の異なる複雑性を処理しながら、音声／文字を用いて社会意義活動に従事しなければならない。しかし、複雑であることそれ自体が問題ではない。複雑さを解読する手段の欠如が学習を困難にしている場合が多いからである。

本研究では、日本語テクストの読解において、特に文をそれより小さな構成体である語群に下級化することで内包化する「埋め込み文」を複雑性の例にとり、実際の日本語学習者がその複雑性を意味機能的に克服していく過程を体系的に提示する。この提示は、言語の複雑性が体系機能的に解析が容易であり学習が可能であること、さらに、日本語初級段階で教授・学習される簡単な文構造の学習が現実的には上級レベル以上の精密な読解の鍵となる事実を顕示する。

## ２．日本語における関係過程文

外界及び人の内面世界の経験を表象する経験的な文法は、外界・内面的経験世界で展開するさまざまな過程をいくつかのタイプに系統化する。たとえば、動きや出来事を表象する物質的過程「今年の夏は海に行く」、言語を伴う活動を表す言動的過程「彼はさよならを言った」、五感による知覚を捉える精神的過程「彼女たちを羨ましく思った」、物事の所在や性質・同定を表す関係過程「僕の友達はあの人だ」など、大きく４つに類型化される（Teruya, 2004, 2007）。以下では、その中でも関係過程に焦点をあて、日本語学習者が法律の科目の課題としてあたえられた以下の抜粋の英訳のために解決しなければならなかった言語の意味構造について言及する（下線部については後述する）。

「第一条　この法律は、司法を通じて権利利益が適切に実現されることその他の求められる役割を司法が十全に果たすために公正かつ適正で充実した手続きの下で裁判が迅速に行われることが不可欠であること、内外の社会経済情勢等の変化に伴い、裁判がより迅速に行われることについての国民の要請にこたえることが緊要となっていること等にかんがみ、裁判の迅速化に関し、その趣旨、国の責務その他の基本となる事項を定めることにより、第一審の訴訟手続きをはじめとする裁判所における手続全体の一層の迅速化を図り、もって国民の期待にこたえる司法制度の実現に資することを目的とする」[1]。

## 2.1　文法的構成要素としての文と関係過程文

上記した種々の経験的過程は、日本語の場合、文（あるいは「節」）に具現される。文は言語の最大の文法的単位であり、一般的に文章と呼ばれるものは、文や複文（意味論理的に結合された複数個の文）によって構成された結束性をもつ音声／書記言語をさしている。複文は、文より通常大きいが、結合される文の数には制限がなく、再帰的に何度も結合が繰り返されるという点で言語の文法単位とは言えない。先に述べた関係過程は、日本語の場合、ふたつの関係づけられる実体が関係づける過程で結合される「Ｘが／はＹだ」という関係構造に映し出される（記号「＾」は「が続く」という意味）[2]。

A）＜関係づけられる実体Ｘ＞＾＜関係づけられる実体Ｙ＞＾＜関係づける過程＞

この関係過程文は、意味的に同定関係か属性関係を表現する。同定・属性関係の違いについては後で述べるが、いずれの場合も、２つの実体の同定・属性関係づけは、動詞的要素のコピュラ「だ」がおこなう。関係づけられる実体Ｘは、名詞群、Ｙは名詞群か形容詞群によって実現される（後者が形容詞群の場合は、関係づける過程のコピュラがない場合もある）。関係づける過程を表す動詞には、コピュラ「だ／です」の他、「意味する、示す」や動詞の時制が中立化した[3]「（と）いう、（と）呼ぶ」などがある。

---

[1] 裁判の敏速化に関する法律の「目的」（平成十五年法律第百七号、首相官邸）

[2] 日本語の関係過程には、同定・属性関係以外に、義務的な構成要素である存在物と時空を表現する任意の要素が「ある」「いる」などの存在の動詞群で関係づけられる、物事のありかを時空に位置づけて存在を描写する下位型がある（寺村、1982、Teruya, 2007）。ここでは関係構造が異なるため取り上げない。いずれにしても、それが規定を示す埋め込み文として機能する場合の文法的ふるまいは、以下の記述と同じである。

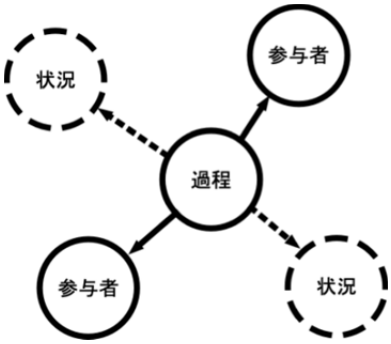
[3] ここで言う動詞の時制の中立化とは、たとえば、「陽子と中性子の個数の合計を質量数と呼ぶ」の「呼ぶ」を「呼んでいる」としても意味的な違いはなく、補助動詞の「いる」が動作動詞のテ形にくみあわさって意味する「歩いている」のように現在持続する動作はあらわさないことを指している。後述する「この法律は‥することを目的とする」の「する」もこれと同様である。

上記のＸとＹの名詞的構成素は、普通一個以上の構成素（語彙的な名詞と文法的な助詞の結合）からなる名詞群によって実現されるが、たとえば「ことばの意味のしくみは」のように名詞が並列的に連結した拡張名詞群である場合もあり、さらに、あとで考察する、文を内包した複雑な名詞群である場合も多い。

あとで複雑な名詞群を内包した関係過程文の解析に必要となるため、視点を変えて意味論的な立場から上記の関係構造を考えておこう。関連づけを表象する関係過程文は、「である(being)」という状態を表す＜過程＞と、その状態を実現するのに不可欠な義務的要素、つまり関係づけられる２つの＜参与者＞をもつ。参与者の数は、過程の素性によって異なるが、通常 1 個から 3 個に及ぶ。

たとえば、ある文が関係過程であれば、関連づけられる「Ｘ」と「Ｙ」の〈参与者〉がふたつ、それが視覚による精神的過程「見る」であれば、視覚によって「感知する人」と視覚を通じて意識に浮かぶ「現象」のふたつとなる[4]。このような参与者の文法的な標示はかなり一般的であり、名詞群の助詞が「が」「を」（あるいは「に」）であれば＜参与者＞を示し（ただし、それらは主題化されるといずれも「は」に置換される）、それ以外であれば＜状況＞を表す。それ以外の場合、つまり助詞をともなわない名詞（例「明日」）や「が、を」以外の助詞（から、で、まで等）によって標記された要素は、中核となる「参与者＋過程」の結合が生成されるさまざまな状況、たとえば、時間や場所などを任意に表現する（図 1 を参照）。

**図１：経験を創出する文の意味結合(Halliday & Matthiessen,1999)**




[4] 動詞の形態論的違いを捉えた「自動詞」と「他動詞」という用語も、前者が参与者をひとつ、後者がふたつ要求することと関連づけられることからある程度有効ではある。しかし、動詞「あげる」が参与者がみっつ、文が使役形になれば参与者の数が複数個になる事実を捉えられていない。

これらの意味的むすびつきの要素は、文法的には、以下のような文法単位の階級尺度（rank scale）（Teruya, 2007; Halliday & Matthiessen, 2013）によって規定され文を具現化する。

**図 2：文法単位の階級尺度(rank scale)と文の階層構造**

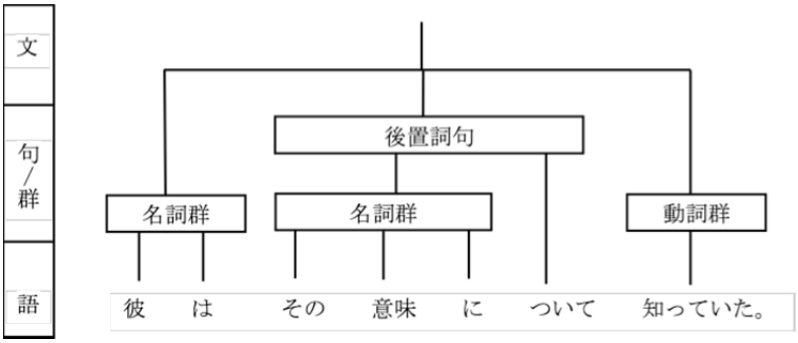



図 2 に示したように、たとえば、最上級の言語単位である「文」は、下級単位である名詞群や後置詞句、動詞群などによって具現され、それらの群／句は、さらに下級にある単位「語」によって、そして、図では割愛してあるが、群／句は、さらに下級にある形態素（たとえば「知っていた」の場合 sit-te-i-ta）によって順次具現される。いずれの群／句も、たとえば、名詞修飾助詞「の」や列挙の助詞「と」の使用で「すべてのショッピングとキャッシングのご利用分が」のように複雑結合の名詞群として、あるいは動詞群の場合、たとえば「行けたのかもしれない」のように形態論的な膠着で拡張が可能である。

この文法単位の階級尺度は、このような上級単位がひとつ下級の単位によって最下位まで具現が繰り返されるという文法原理以外に、以下で分析の対象となる階級変更(rank shift)の原理をもっている。階級変更とは、たとえば「[[文]]^名詞群[5]」という構造で文が名詞群の構成要素として下級化(downrank)され後続する名詞的要素を修飾する規定語として働く文法的仕組みのことを言う。つまり、日本語学習者は、単語と関わる助詞のような局所的な文法を学習するだけでなく、文のそれぞれの構成単位が文内部で機能する原理を習得しなければならない。さもなければ、精密な読解に必要な言語単位の認知はできず、よって意味理解ができないことになる。

[5] 埋め込まれた「埋め込み文」は、角括弧[[..]]で表記する。

文の規定語群としての下級化は、以下の表 1 に示したような内部構造をもっている。これは関係過程文を例にしたもので、語群に埋め込まれた文の規定関係は、過程型に関わらずほぼ似た関係をさしだす。この例の場合、機能的に属性を体現する構成要素Ｘと、その属性を描写するＹはいずれも名詞群によって具現されているが（寺村 1982、Teruya, 2004, 2017）、後者は、規定の対象として名詞群の最後に後置された 1 つの事例、この場合「ビートルズの『ノルウェイの森』」を、下級化された埋め込み文がその詳細をあたえて規定している。このように名詞群を意味的に規定する埋め込み文は、後述するように、文としての意味構造を維持しながら名詞群の構成部分として機能している[6]。

**表 1：埋め込み文を内包した関係過程構造**

| | それは | [[どこかのオーケストラが甘く演奏する]] | ビートルズの『ノルウェイの森』 | だった |
|---|---|---|---|---|
| 文 | X：体現者 | Y：属性 | | 関係過程 |
| 群 | 名詞群 | 名詞群 | | 動詞群 |
| | | 規定する埋め込み文 | 規定される名詞群 | |

このような関係過程文は、種々のテクストに現れる。テクストは、社会コンテクスト（Halliday, 1978）で展開する社会意義過程を実現するような形で具現する。社会コンテクストで「何が起こっているのか」という活動領域の観点から捉えると、たとえば、ウィキペディアのように通俗的常識あるいは科学理論にもとづいて実体や現象を客観的に分類・説明することを目的とする「解釈する」コンテクストでテクストが生成される場合、命題に対する主観的な態度を示すモダリティー表現はほとんど表出しない。しかし、社説や演説のように公共の場で社会的価値観を吟味する「探求する」コンテクストでは、モダリティー表現が顕著になる（Matthiessen, 2015）。表 2 は、日本語学習の方向性と社会コンテクストと学習言語の素性を学生に体系的に把握させるために実際の日本語教育の現場で使用している社会意義過程のトポロジカルなパラメータを表にしたもので、テクスト例を右側に加えた。

[6] 形態素にもとづいた直接構成素分析である入子型構造はここでいう階級構造とは異なる。入子型構造を用いた日本語教育については、橋本（2011）を参照。

**表 2：社会意義過程の類型とテクスト例**

| 上位 | 下位 | モノローグ | ダイアローグ |
|---|---|---|---|
| 解釈 | 分類 | ウィキペディア | 口頭試験 |
| | 説明 | 研究論文 | |
| 報告 | 時系列化 | ニュース記事，バイオグラフィー | メディアインタビュー |
| | 調査 | 地理調査 | |
| | 一覧化 | 業務日誌 | データーベースクエリー |
| 再現 | 語り | 物語，小説 | ドラマ |
| | 脚色 | 脚本 | 演劇 |
| 共有 | 経験の共有 | 回想，ブログ | 会話，オンラインチャット |
| | 価値の共有 | | うわさ話 |
| 実行 | 協同 | 儀式（冠婚葬祭等） | 委員会，商業通信 |
| | 監督 | 買物リスト | 招待状 |
| 推薦 | 促進 | 広告，宣伝 | ビジネス電子メール |
| | 忠告 | アドバイス，警告 | 相談 |
| 可能化 | 規制 | 会則，条例 | 公開状 |
| | 指示 | 談義 | デモンストレーション |
| 探求 | 批評 | 社説，解説 | 読者の声 |
| | 議論 | 演説 | パネルディスカッション |

以下に例をあげたように、関係過程文は、これらの社会意義過程のいくつかの領域に顕著に現れる。以下に関連する社会意義過程とテクスト型の例をあげた。関係過程文の内部構造の複雑性は、この場合、文のながさに比例して複雑である。しかし、この場合、名詞群に文を規定語として組み入れる階級変更(rankshift)によって文中の語彙の密度が高くなることによってもたらされる複雑性を意味する。テクストのコンテンツの専門性が高くなると埋め込み文が多くなり、よって関係過程文が複雑になるからである。日本語能力の上級化のためには、パーソナライズされた言語による意味づくりの潜在性(personalized meaning potential of language) (Matthiessen, 2006: 35)の発達が不可欠である。日本語自体の意味づくりの総体的潜在性、つまり日本語が創出し得る意味づくりの全体的体系ではなく、学習者個人が社会コンテクストで必要とする意味づくりの潜在性の発達が必要なのである。そのためには、すべてのテクスト型が理解できるようにならなければならず、よって、関係過程文の解析を学習者は迫られることになる。

【再現—物語】ぼくはカツオである。

【報告—ニュース（追悼）】マーロンブランドは、[[ [[彼の世代を代表する]]もっとも影響力をもつ]]俳優の一人であった。

【探求—評論（映画評論）】[[外国人の日本に対するイメージでよく挙げられる]]のがニンジャ」、「サムライ」、「フジヤマ」、そして[[『SAYURI』で取り上げられている]]「ゲイシャ」だ。

【解釈—説明（ガイドライン）】[[オーストラリア市民権を取得する]]ことは、[[ある独特な国の社会に加わる]]ことを意味します。

【可能化—規制（ODA 評価ガイドライン）】[[我が国の開発協力の効果を最大化する]]ためには、[[ [[政府・実施機関が一体となり、様々な関係主体とも連携しつつ、我が国の有する様々な資源を結集して、開発協力の政策立案，実施，評価のサイクルに一貫して取り組むという]]戦略性を確保する]]ことが重要である。

## 2.2　関係過程文の構造

関係過程文は、先に述べたように、関係づけられる構成要素とそれらを関係づける過程によって生成され、同定関係あるいは属性関係を表現する。このふたつの関係過程文構造に、規定化する埋め込み文の関係構造をいれると、以下の３つの文構造が判定できる。これらの構造は、先に提出した意味構造（A）と具現関係(realization relationship)をもっている。関係過程文の場合、文の構成要素である二組の名詞群がそれぞれ＜参与者＞を、そして動詞群が＜過程＞を文法的に具現する。この場合、単に構成素名称「名詞群」を意味的カテゴリー＜参与者＞に名称替えしただけに過ぎないととれないこともないが、そうではない。実際、埋め込み文を内包した名詞群（D）が文中で義務的要素である＜参与者＞として機能しているということ、さらには、ある名詞群が＜参与者＞あるいは＜状況＞という異なる文法的立場を具現していること、つまり文の義務的要素と任意的要素を区別することは、構成素名称のみでは不可能である。よって、以下の一連の構造は、（B）と（C）が（E）を、（D）が（F）を具現する可能性を同時に捉えている。

【関係過程文と埋め込み文の構成素構造】

（B）名詞群＋名詞群＋動詞群［コピュラ］

（C）名詞群＋形容詞群（＋動詞群［コピュラ］）

（D）[[文]]^名詞群

【関係過程文の意味構造】

（E）参与者＾参与者＾過程

（F）参与者／状況

しかし、実際には、関係過程文の構造は、上記の一連の具現構造が意味づくりを機能的にどのようにおこなっているのかという意味文法的役割の判定なしには、精密に捉えることはできない。先に、経験を創出する日本語の経験的文法は、外界・内面の経験世界を４つに類型化して文法化することを述べた。このことは、４つに類型化された文が４つの異なる機能構造をもっていることを同時に意味している。

以下の図3に過程型4つの機能構造と構成素構造との具現関係を図式化して示した。図の下部に示した品詞と文法単位の階級尺度によって得られる文の構造は一般的であり、この場合、文の意味解釈は構成素単位の語彙的意味のあり方のみに依存していて、たとえば助詞「を」を従えた名詞群の文中での意味・機能的素性について、それらの構成素構造は語彙の意味素性以外について何も語らない。

それとは異なり、経験過程を機能的にとらえた機能構造は、過程型個別の内部構造、そして具現化の可能性を指定することで学習者に理解の文法的規範をあたえる。たとえば、「言うこと(saying)」を表象する言動過程文の機能構造＜言い手＋話の内容＋過程＞は、助詞の「が」と「を」でマークされた参与者が２つと言動活動を表す言動過程「話す、相談する、聞く、ほめる、叱る」以外に、＜言い手(Sayer)＞が意識をもつ人間のような実体を表す名詞群でなければならないことをそれぞれのカテゴリーは示している。

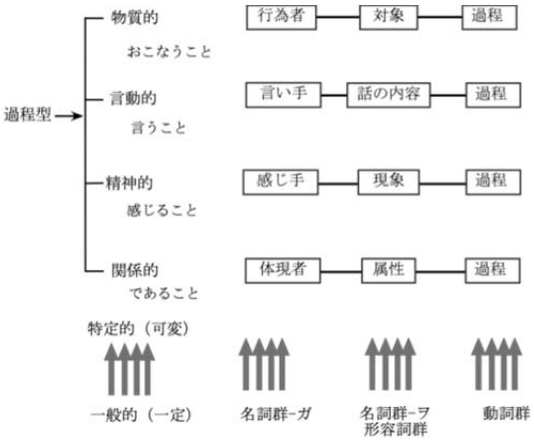
さらに、もう一方の参与者＜話の内容(Verbiage)＞は、意味的に（1）発話機能の「内容」と（2）「話の主題や題材」を表す。以下に＜話の内容＞を具現する名詞群の３つの意味類型を示した。

（a）発話機能を表す名詞（「文句、意見、日本語」など）
（b）動き・状態・性質をあらわす抽象名詞（「生活、愛」など）
（c）具体名詞（「長野さん、車」など）

＜話の内容＞の（1）は（a）によって、（2）は（b）か（c）によって具現されるが、＜話の内容＞は意味的に抽象的でなければならないという制約をもっている。そのため（c）の具体名詞、たとえば「長野さんを」を用いる場合、そのままでは抽象性に欠けるため形式名詞の「こと」を付与し、たとえば「長野さんのことを（話していた）」のように文法化しなければ＜話の内容＞にはなれない。

このように名詞群の意味素性と具現の制約が把握できれば、学習者は文法的なレパートリーをさらに広げることも可能である。たとえば、具体名詞が「こと」で抽象化されて＜話の内容＞を具現する場合、先に述べたように意味的には (2) の「話の主題や題材」を表すため、＜参与者＝名詞群＋「を」＞ではなく、＜状況＞として機能する＜（話の）事柄(Matter)＞「長野さんのことについて」と表現できるという知見を得ることができる。別の言い方をすると、具現関係と文の機能構造関係なくして、たとえば「彼は淡々と生活を語った」と「彼は淡々と生活について語った」が同義であり、相補関係(complementarity)（Halliday,1996/2002）にあることを学習者は捉えることはできず、それらを個別に取り扱う余計な学習を余儀なくされる。

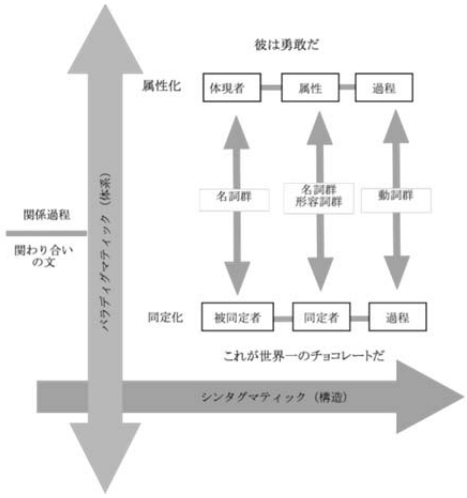
**図 3：過程型の機能構造と構成素構造**




同様に、関係過程文の下位類型である同定・属性関係を機能的な観点から捉えておこう。日本語の関係過程は相似した構造をもつ２つの類型をもち[7]、それらが下位体系をつくっていることはすでに述べた。意味的には、一方が属性化をもう一方が同定化を表現しながら体系化している。関係過程の範列的な体系と具現関係によって統語的に生成される文の構造を図 4 に示した。

[7] これは、論点を絞るため簡略して述べたもので、関係過程は実際にはさらに複雑な下位体系をもっている。たとえば、属性関係には、二項目以上の構成要素が必要な下位型も存在する。たとえば、属性の＜根拠＞を必要とするタイプ「彼は機械に弱い」「彼女はコーヒーにうるさい」や＜体現者＞の範疇を指定する「私はお腹が痛い」「日本は雨が多い」など。ここでは、それらを除いても議論に支障をきたさない。

**図 4：関係過程の範列的な体系と統語的構造との具現関係**




先にみたように文の構成素構造は、属性を表現する文の片方の参与者が形容詞群によって具現されている場合（たとえば「彼はやさしい（です）」）は、同定型とは構造が異なるが、それが名詞群である場合は、構造的に類似している。英語の場合は、不／定冠詞の a や the などを用いることで属性 Sarah is a leader と同定 Sarah is the leader が明示化でき、さらに同定関係であることは、前例の参与者同士が The leader is Sarah のように置換できることで証明が可能である(Halliday & Matthiessen, 2013) 。不定冠詞をもたない日本語は英語と構造は似ているが、この場合、弁別のし方が異なっている。機能構造は、属性化が＜体現者＾属性＾過程＞構造を、同定化が＜被同定者＾同定者＾過程＞構造を具現する。

前者は、先に述べたように＜属性＞が名詞群か形容詞群で具現される。この場合、＜体現者＞として提出されるものやことがらの性質、状態、あるいは、あるクラスの 1 メンバーであるという性質･特徴を表現する。たとえば、先にあげた英語の例文 Sarah is a leader にあたる「サラはリーダーだ」の＜属性(Attribute)＞としての「リーダー」は、リーダーというクラスのメンバーの一人であることを特徴として提示している。＜属性＞が形容詞群によって具現されるときは、＜体現者(Carrier)＞を具現する事物の性質・状態を特徴として表現する。

同定化は、名詞群によってクラスメンバーシップをあらわす属性型と構成素構造が酷似している。不／定冠詞を用いる英語ほど明示的ではないが、日本語は、ふたつの意味文法的操作で「同一性」を＜被同定(Identified)＞と＜同定者(Identifier)＞の両者間に表現する。

ひとつは、同一のものを示す２つの名詞群の一方の＜被同定＞が「内容」を表し、もう一方の＜同定者＞が「表現」を示す構造である。たとえば、「新しい部屋として指定されたのは、三階の部屋だった」という例の場合、埋め込み文を内包した先行する名詞群＝被同定「新しい部屋として指定されたのは」が内容・詳細を示し、後続する名詞群＝同定者「三階の部屋」が先行名詞群＝被同定を名づけている。このタイプの同定関係は、普通この例のように頭でっかちの文構造をもっていて、＜被同定者＞が埋め込み文を内包する名詞群で具現される。これらの関係をさらに一般化して表現する文法用語＜価(Value)＞と＜トークン(Token)＞を使うと、同定関係は＜価＾トークン＞という順序に表現されるといえる。この機能的順序構造は固定されていて、順序を逆にすると以下でみるように、同定関係ではなく属性関係を表す。このタイプの同定過程表現は、定義や特徴づけを担う<解釈>系のテクスト、たとえば科学の教科書や百科事典によくみられる。

もう１つの同一性をあらわす操作は、意味構造を文法的に明示する方法である。先に例示した英語の同定文のように、前述の＜被同定＞と＜同定者＞の位置を逆にした機能構造は＜同定者＾被同定＾過程＞となるが、日本語の場合＜同定者＞を具現する名詞群は助詞の「は」ではなく「が」でマークされなければならない。たとえば「これが戦争だ」は同定関係だが、「これは戦争だ」は属性関係となる。つまり、＜価＾トークン＞と＜トークン＾価＞の２つの配列は、それぞれ同定化と属性化の意味の具現を決定する。簡単に表 3 にこれらの関係をまとめた。

**表 3：同定化と属性化の意味機能構造**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同定化 | 被同定/価 | 同定者/トークン | 過程 | 新しい部屋として指定されたのは、三階の部屋だった |
| | 同定者/価 | 被同定/トークン | 過程 | これが戦争だ |
| 属性化 | 体現者/トークン | 属性／価 | 過程 | これは戦争だ |

## ３．複雑な関係過程文の解析

上記では、ふたつの構成要素が関係づけられる構造的には単純な関係過程文を概観した。下位体系を視野にいれると複雑になるが、この程度の理解は日本語学習者にとってむずかしいことではない。実際、それは最初に提出しておいた複雑な関係文をもつ法律条文の理解に十分な解析手順を学習者に提出したものである。

日本語学習者が英訳と中国語訳に用いた解析の手順を要約するとつぎのようになる。①まず図 2 に示したように助詞などの形態素情報をもちいて意味理解の単位となる名詞群や後置詞句、動詞群などを判定する。②図 1 に示した文の意味構造を動詞群ごとにまとめる。動詞群がふたつあれば、意味構造がふたつ判明され、動詞群の形態素的な形によって文の素性（たとえば、辞書形であれば埋め込み文、テ形であれば従属文など）が明らかになる。そして③浮上した文の意味を過程型との関係で把握する。当該の法律条文の翻訳を課題とする学生の場合、幾重にも内包された埋め込み文が理解を困難にしているだけであり経験的過程の範列体系と当該の統語構造の理解には問題がなかったため、②の構造の詳細が分析できた段階で翻訳[8]が可能となった。紙片の都合上、法律条例の下線で示した冒頭と末尾の分析をあげる。

① 名詞群ハ ^ 名詞群ヲ ^ 後置詞句 ^ 名詞群ガ ^ 副詞群 ^ 動詞群 ^ 名詞群コト..... 後置詞句 ^ 名詞群ニ ^ 動詞群 ^ 名詞群ニ ^ 動詞群 ^ 名詞群コトヲ ^ 名詞群ト ^ 動詞群

② 参与者ハ ^ [[状況 ^ 参与者ガ ^ 状況 ^ 過程]]コト..... 状況 ^ 状況ニ ^ 過程]] ^ 参与者]]コトヲ ^ 参与者 ^ 過程

このような手順で解析すると、図 5 に示したように、この条例が内包する埋め込み文は全部で 14 個で、一番大きな名詞的枠組みを示す埋め込み文だけを保存すると、この一見複雑にみえる文章が実際にはシンプルな構造をもち、「この法律は[[..]]ことを目的とする」であることが明らかになる。全体を支える枠組みがわかれば、あとは埋め込まれている文の依存関係に従って考えることで、精密な理解が可能となっていく。

**図 5：法律条例の内部構造**

この法律は、 **[[** [[→]] **[[** [[→]] **[[** [[→]]→**]]**→**]]**、 **[[** **[[** [[→→]]→**]]**→**]]** 、
**[[**→ **[[** [[→]] →**]]** **]]**、 **[[** [[→]] 、 [[→]]→**]]** →**]]** ことを目的とする。

[8] 「Where it is essential that trials should be facilitated under a completely fair and appropriate procedure in order that rights and interests are properly realized through the administration of justice, and that the Judiciary accomplishes all other roles required of the Judiciary, thus, along with changes in social and economic conditions both in Japan and abroad etc., there is an urgent need to respond to requests from the people in relation to facilitating trial, this Act shall aim at further facilitating the entire proceedings in courts, including litigation proceedings in the first instance by providing for the purpose, responsibility of the state, and other basic matters in facilitating a trial, and accordingly, contribute to achieving a judiciary system that responds to the expectations of the people.」（翻訳は Cheryl Po 氏の同意を得てここに掲載。）

## ４．単純さから複雑さへ、上級レベルへの発展

本研究では、ふた項目を関連づける「Ｘが／はＹだ」という一見簡単に見える関係過程構造に焦点をあて、ある日本語学習者が専門的なテクストを正確に理解し英訳するに至る過程に必要な言語理解を体系機能的に観察した。通常、日本語の初級レベルで導入されると、学習事項として再度取り上げられることのおそらくない簡単な構文である。しかし、実例を通じて示したように、関係過程構成要素に文が埋め込まれることで同定関係が表象されるだけでなく、性質・特徴づけを必要とする難易度の異なるテクスト、たとえば法律条例のような専門的なテクストには関係過程が頻出する。つまり、簡単な構造が複雑さを生み出しているのである。

このことは、初級レベルで導入した関係構造を日本語学習カリキュラムの中級・上級に再導入する必要性があることを示唆している。実際、日本語能力試験のレベル認定の目安として、Ｎ１には「複雑な文章や抽象度の高い文章」を読んで「文章の構成や内容を理解することができる」が掲げられている。ここで言う複雑さは、少なくともふたつの局面をもっている。複数個の文を意味論理的に結合・拡張させて生成する複文（Teruya, 2006、照屋、2015）、そして、本研究でとりあげた文構成要素内に文を再帰的に埋め込む埋め込み文である。言語の複雑性は多様であり、同じ手順ですべての複雑性が簡素化できるということはないが、日本語学習者が複雑性を解体する手順として体系的に用いた意味・機能的なアプローチは、複雑な関係過程構造の理解には有効な学習ストラテジーだと言えるだろう。

## 参考文献

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版

照屋一博（2015）「複文解析と文法的思考—中・上級日本語教育への体系機能的アプローチー」『日本学刊　第18号』32-45

橋本恵子（2011）「入子型構造を用いた日本語教育の実践研究」『福岡工業大学研究論集　Vol.43 No.2』143-155

Halliday, M.A.K. (1978). *Language as Social Semiotic: the Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Arnold.

Halliday, M.A.K. Grammar and daily life: concurrence and complementarity. Reprinted in Webster, J. (ed.), *The Collected Works of M.A.K. Halliday, On grammar* (1996/2002), London & New York: Continuum, p.p. 369-383.

Halliday, M.A.K. & Christian M.I.M. Matthiessen. 1999. *Construing Experience through Meaning: a Language-Based Approach to Cognition*. London: Cassell.

Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C. M. I. M. (2013). *An introduction to functional grammar* (4th edition). London & New York: Routledge.

Matthiessen, C. M. I. M. (2006). Educating for advanced foreign language capacities: Exploring the meaning-making resources of languages systemic functionally. In H. Byrnes (Ed.) *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygotsky*. London: Continuum, pp. 31-57.

Matthiessen, C. M. I. M. (2015). 'Register in the round: registerial cartography'. *Functional Linguistics 2:9 (2015).*

Teruya, K. (2004). Metafunctional profile of the grammar of Japanese. Caffarel, A., Martin, J. & Matthiessen, C.M.I.M. (eds.), *Language Typology: a Functional Perspectives*. Amsterdam: Benjamins, pp. 185-254.

Teruya, K. (2006). Grammar as a resource for the construction of language logic for advanced language learning in Japanese. In Byrnes, H. (Ed.), *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygotsky*. London: Continuum, pp. 109-133.

Teruya, K. (2007). *A systemic functional grammar of Japanese* (Two volumes). London: Continuum.